母は私を産むと決断し、ポジティブな考えで帰国の途に着いた。その一方で、武田先生は迷い続けた。彼の日記から摘出してみよう。

一二月一日　　月曜日

そわそわして心配そうな顔をして今朝アンドレアが寮に訪ねてきた。妊娠したというのだ。何で避妊薬を使わなかったのかと僕は不満だったが、それだけは言わなかった。テストはすぐには出来ないから、妊娠は今のところ確認できない。もしそれがほんとうだとすれば、僕はどうしたらいいのだろう。冷静に、冷静に考えなければならない、

僕には日本に幸子と言う許婚者がいる。正式の婚約はまだ結ばれていないが、両家の間には黙約があり、破約をしなければならない。破約をすれば、学習院での僕の立場が悪くなる。幸子は前田元侯爵の姪だ。格式を重んじる大学の理事会ににらまれることは確かだ。東大に帰る道はすでにとざされている。地方の大学？　　都落ちだな。

母とアンドレアの折り合いも心配になる。母は伝統的な姑の立場を固執するだろう。それではアメリカで自由に育ったアンドレアが可哀想だ。

戦後進駐軍の下で大学生活を送った僕達の世代はアメリカ人に引け目を感じている。その一方で、親達の戦中派は鬼畜米英を今でも恨んでいる。「なんだ、毛唐と結婚したのか」と怒鳴られるだけではすまない。「家名を汚した」といって勘当されてしまう。それでアメリカに住むとしよう。アメリカの大学で教師になるのにはＰｈＤが必要だ。僕にはその学費を払う資力がない。アンドレアに働いて貰う外に道はない。では誰が生まれた子の世話をするのか。アメリカの優秀な大学院生と競争して、日本人である僕がいい大学で、アメリカ文学を教える自信はない。高校の先生になる道があるかもしれない。しかしこれは怖い。僕は文学のことはよく心得ている、英文法もよく知っている。しかし、いくら練習をしてもＬとＲの使い分けはなかなか出来ない。オースチン少佐にそれを注意されたこともあった。英語を話す日本人の弱みだ。それで高校の先生が勤まるかしら。

ここまで読んで思わず声を出した。

「あいつ自分のことしか考えていない。百パーセントエゴイストだ。」これ以上読みたくなかったので、日記帳を床の上に放り投げた。

「まあ、あなた」とナンシーが近寄ってきた。「怒っていらっしゃるの。」

「うん、母さんの胎内にいた僕のニーズを忘れて、『おろせ』と言い、自分のキャリアに都合がいいかどうかしか考えない。あんな奴が僕の生みの父だと考えるだけでぞっとする。われ殺人魔の息子でござる、ということになってしまうからさ。」

「でも武田先生は母さんと結婚することを考えていたから愛していたんでしょうし、日記は自分の為に書き他人に読ませるものではないのに、武田先生はわざわざあなたにそれを送ってきた。すべてをあなたに告白し、あなたの赦しを求

めているんでしょう。」

ナンシーの冷静な言葉には一理あった。取り直して読み続けることにした。

以上結婚してアメリカに住むことを前提にする道を考えて見たが、それは今の僕には許されていない。フルブライト奨学金受領者は日本に帰って職務につくことを義務付けられている。フルブライト委員会は僕がアメリカ人と結婚すると申請したら、結婚自体に反対しなくても、帰国契約の履行を迫るだろう。本音は勿論この若造の結婚に反対なのだから。

僕の感情は複雑だった。一度会い一夜過ごしただけで、僕は彼女に心からほれこんでしまった。若し彼女が今朝僕を抱きしめ、結婚して頂戴と言ったら、僕はイエスと言ったに違いない。今日は冷静でよかった。助かった。

一二月四日　　木曜日

アントレアからパリに行っておろすと言う手紙が昨日来た。一日よく考え、これで僕たち二人とも自由になれるという返事を書いた。

一二月一三日　　土曜日

昨晩パリから電報が来た。アンドレアからだ。

とあるだけで、ああ彼女やったな、と思った。胎児をどうやっておろしたのか、つぶさに知ることは出来ない。アンドレアすまん、痛かっただろうな。でもいいことをしてくれた。これで僕たち二人とも自由になれるから。

「自由、武彦、おまえ本気かね」と誰かが僕にささやいているような気がした。「お前はね、恋人の胎内にいたお前の子を殺した殺人犯だよ」とその声は続ける。いい加減にしてくれ、ここから出て行け、と僕はその声に向かって声をあげた。その時きこえたのは、僕自身の甲高いぶるぶるとした恐がりやの声だった。

一〇時過ぎ、ルームメートのジムが部屋に戻ってきた。どうしたのだ、と聞くので、電報をみせた。「へえー、てめえ、すげえ。東京からきて俺の知らない中にパリに女友達をもち、今絶交状をたたきつけられたのか。」

ジムはこの電報を絶交状だと思っている。そうか、アンドレアは僕を見放したのだ。すっかりこの世の中がいやになってしまった。なかなか寝付かれず、ポーのレーバンの夢をみた。真夜中に疲れたわが耳にトントンと音が聞こえてくる。季節外れの暴風雨が窓ガラスを容赦なく叩いていた。

一二月一四日　　日曜日

今朝気まぐれに学寮の向かい側にあるブロードウェイ長老教会の礼拝に行ってみた。米英文学を理解するのにキリスト教の知識をもつのは重要だが、それを信じるつもりはない。牧師さんのマッコンブ博士はイエスが処女であるマリアから生まれたのであり、この罪のない救い主がわれらの贖罪にどれだけ必要なのか、クリスマスの前によく考えておきなさいと滔々と述べた。僕はアンドレアの妊娠が処女懐胎だったらよかったな、と妄想をし、彼女のことしか考えなかった。絶交という言葉は心に矢を刺すかのように、全身を強く痛める。しかし僕にとってそれはキューピッドの矢であって、以前よりも彼女が恋しくなってしまうのだ。

一二月一七日　　水曜日

一週間に一度水曜日に必ず幸子に手紙を書く。今日書きはじめたが、なかなか筆がすすまない。アンドレアと幸子と僕はどちらを愛しているのかわからなくなっている。一方を愛していると思えば、他方にすまないという罪悪感が盛り上がり、心苦しくなる。ジムが冬休みバーモントにスキーに行かないかと誘ってくれたが、断った。北陸の雪と金沢での嫌な思い出がそれと重なっていた。そのとたん、僕は心の中で、金沢と縁の深い前田家の血を引く幸子を拒絶したのではないかと思い、自分の思考プロセスに嫌気がさしてしまった。

血筋、どこの国でも重要だ。アンドレアに堕胎をすすめたのは間違いだった。彼女が宿していたのは僕の血をひく子だったのに。その意識が僕を幸子からひきはなし、アンドレアに向けていってしまう。